女の道づれ

佐多稲子

講談社

女の道づれ

昭和四一年五月一〇日第一刷発行
著　者　佐多稲子
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽町三ノ一九
振　替　東京三九三〇
電　話　東京（942）一一一一（大代表）
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　有限会社大光堂
定　価　四三〇円
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
©佐多稲子　昭和四一年　Printed in Japan

女の道づれ　目次

壹

豆自伝　11
私の若い日　12
丸善のおもいで　16
「驢馬」同人との出会い　22
わが青春の時代　23
戦時下のこと　25
ピンチよさようなら　29
遍歴のペンネーム　33
わたくしのこと　34
はじめての本　37
読書について　39
読書とわたし　40

本とつきあう法　44
私の本　54
私の昭和史　55
つらい思い出　58
ゆらぐロウソクの連想　62
女の美しさの意味　66
「女くささ」「男くささ」　71
女性からの注文　73
就職と幸福な結婚　74
結婚についておもう　75
心の目を持つ　76
〝甘え〟からぬけよう　78
婦人の生き方　80
女性と職場　82
職業と生活　92
労働の実感　95

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

若い肉体の微妙さ　96
可愛いいのよ、赤ん坊！　99
絶対な愛情と現実　100
子どもとともに　103
この頃おもうこと　106
母と息子　109
新しい良妻賢母とは　111
新しい姑と嫁　113
わたくしの母　117
実母以上に縁深く　118
お中元　119
七五三の祝い　121
七五三の親ごころ　123
少年少女の雇い主へ　125
今日の十代　127
気がついたこと　130
整然と情熱をもって　131
ゆううつな春　136

貳

新しい一年とわが想い　143
楽しくもあり……　144
ぐうたらの記　147
東京の中の旅　149
伊香保にて　152
長崎の歌　157
春を待つ心　159
どこでも聞く歌声　160
春野菜と竹筒の酒　162
ヒナまつり　164
〃花まつり〃におもう　166
銀座と草履　168
橋の名　171
梅雨の眺め　172
雨ガサ　175
日本の屋根　176

郭公とほととぎす 178
盆まつりの家族の出会い 181
伊勢型紙と松阪木綿 184
紺がすり 187
季節の変り目 189
信州聖高原 190
山に征服された喜び 192
今日のつながり 194

歳末の回想 197
四十年昔の上野 199
商標というもの 201
習慣の現われ方 203
取材のときの話 205
住宅の苦労 208
一つの感想 214
美しい縁 217

参

壺井栄さんとのつき合い　225
円地さんとの縁　229
畔柳二美さんをしのぶ　232
高見さんのこと　235
小田切秀雄さんのこと　238
筒井敬介さんのこと　241
私の夢二　243
うちにいた、たっちゃん　245
二三の作品の中で　246
四角い卵　249
娘時代　250
日本労働組合物語　252
八月十五日と私　254
あとがき　256

カバー文様・著者愛用の琉球紺
レイアウト・栃折久美子

随筆集

女の道づれ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

壹

豆自伝

十代のはじめから文学少女だったことはたしかだが、その十代に境遇が激変して、義務教育も終らぬうちに人中で働かねばならなかったので、何かになろうという志望を抱く余裕はなかったのだとおもう。目の前を手探りしているような生き方で、二十歳頃までに可成り変化のある生活をした。そのあげく絶望して自殺をしようとして、あやうく助かった。

あやうく助かった、というのが私の人生の転機になった。私はいわば恥をさらけ出し、敗北を表明したということで、生き方に腰が坐ったようなところがあった。世の中のしきたりに拘束されまい、と覚悟するほど弾みがついて、恋愛をした。その恋愛が私の場合、無意識に文学と結びついていたわけである。私の結婚した対手が文学志望であったし、その周囲には高い文学的雰囲気があった。私はその時も自分が作家になろうとおもっていた

わけではない。私は夫の志望を援けようとおもい、その前からの引つづきでカフェーに働いていた。

そういう生活は多分に、当時でいえば文学的なものだった。自殺未遂を転機として継続した人生は、私には新しい青春といえるものだった。この時私の生活ははじめて意識的なものになったようにおもう。が、こののちも、私は夫や友人たちのあとについて、思想的に左翼に変り、文学のことよりも、社会運動の方に実践的に加わりはじめた。その生活費を稼ぐために、今でいうアルバイトのような仕事をした。

そういう中で、プロレタリア文学団体の機関誌に、ふと、書くようになった。ふと書くようになったというのはおかしいが、全く、ふと書くようになったのである。つまり意識的に人生を生きるようになったとき、私は、子どもの時からの文学少女の夢に、いつとなく近づいていたのであろうか。

（32・10・別冊文芸春秋）

私の若い日

十七歳から十八歳まで、私は上野山下のある昔ふうの料理屋に働いていた。その店は、結婚の披露宴もあるし、葬式のあとの会食もあり、その他の宴会もあるという料理屋であ

った。そんなに大きな家ではなかったが毎晩芸者がはいって三味線の音がどこかの座敷から流れていた。そんな店なので、そこで働く女中は、日本髪に結って、黒じゅすのえりのかかった着物をきて前だれをかけていた。着物の柄は必ず地味なしまものでなければならなかった。客は、若い人よりも年配の人が多かった。

私は毎朝起きると座敷の掃除をする。ときには豆腐のからで廊下を磨く。それから料理の仕込みといって、えびの皮をむいたり、魚の身をすったり、栗の皮をむいたりする。そして風呂へゆき、それから着更てお客さんを待つ。ほとんど一日、料理やお酒を運んで梯子段をあがり降りして、十時にかんばん。それから片づけて寝るのは十一時や十二時過ぎになる。自分の自由な時間というものはほとんどない。勝手に外出など勿論できない。私は、ここに働いていて、自分の家へお金を送っていたが、どうにもここの生活には自分の青春がない、ということが辛くて、一年余りののちそこをやめた。私は本が読みたかったし、日本髪でない髪も結いたかったし、しまでない着物もきたかった。

私が何故、そういう願望を抱いていたかというのは、もともとそういう下町の家庭のものではなかったからだとおもう。十二歳の秋に郷里の長崎から一家を挙げて上京して、その当時の激しい不況時代で父が就職できなくて、急速にその日の食べるものにも困ることになって、私は小学校も尋常五年の半ばでやめ、それからキャラメルを作る工場へ行ったり、支那そば屋へ奉公したり、また上野のその店にも小間使いの奉公をしたりして成長し

たが、生れた家庭の雰囲気は私に本を読むことを習慣づけていた。私の父親は中央公論など読む会社員だった。だから昔ふうの料理屋で働いているのは、自分の心持にそぐわないので辛かったのである。

十八歳の秋から二十一まで日本橋の丸善の洋品部の女店員をしていた。

ここでは以前よりずっと私の気分に合うものがあった。アナーキズムに少しかぶれていた友達が私の親友になった。彼女は深川の材木屋の娘でよく肥っていたが、それは健康なものではなく、歩くのにも足を引きずるようにした。彼女は肺を患っていた。

「こんな店に働いていると丈夫なものでも肺病になるわよ」

と笑っている。それなら何故ここで働いているのだ、と私がおどろいて聞くと、どうせ私は長くはないもの、とやっぱり笑っている。そんなところにアナーキズムを見せていたが、やっぱり自分の家でごろごろしていると母親が心配するから働きに出たのだ、というのが実状であった。

「二重橋の中は伏魔殿よ」

男友達に聞いたと言ってそんな話をする。

私にも、その話や、革命の話は魅力だったが、私は私なりの頭で考えて、

「しかし、社会には秩序がなければいけないでしょう」

と、言って、天皇のいることもその秩序のうちに入れて、革命を肯定することができな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com